

軍記物語の女性たち（5）

郷御前の生涯

—『吾妻鏡』—より

岡崎 嘉彦

郷御前は平安時代末期から鎌倉時代初期の女性で、武蔵国の豪族河越重頼の娘に生まれ、頼朝の乳母比企尼の孫娘にあたる。源頼朝の命で源義経の正室となる。本名は不詳。

郷の実家である河越一族は、頼朝の厚い信頼を得ていた。京の義経と鎌倉にいる頼朝の関係が不和になってくると、頼朝は義経を監視する目的で、郷に義経の正妻として嫁ぐように命じる。郷はその命に従い、十七歳で京にいる義経のもとへと嫁いでいく。義経は当時、静を含め幾人もの愛人がおり、郷は忍従の日々を強いられることとなるが、次第に義経へ惹かれていき二人は仲睦まじい関係になっていく。その後、二人の関係は義経と頼朝の完全な対立が始まると同時に危機に陥ることとなる。義経は郷を離縁し、武蔵国の実家に帰るように命じる。そして、義経は奥州へと落ち延びていく。一方、郷は実家のある武蔵国に戻ることなく畿内にとどまり、その後義経を追って奥州へ行くのだが、郷に悲劇が待ち受ける。父重頼と兄重房は郷が義経の正妻であるという^{ちゆうさつ}ことを理由に、頼朝により所領没収の上、誅殺されてしまう。悲しみに暮れる郷であるが、奥州へと向かった後は義経との間に娘を設け、三人は奥州平泉で^{おうしゅうひらいずみ}平穏かつ、幸せな日々を過ごす。しかし、その幸せも長くは続かず、三年の月日が経ち、義経を庇護していた藤原秀衡が亡くなると頼朝を恐れた秀衡の子、泰衡により衣川の館を襲撃され、郷は義経と娘と共に、二十二年という短い生涯を終える。最後まで義経と添い遂げた一生であった。

源義経が愛した女性^{しずか・ごぜん}という、静御前の名が思い浮かぶ。静のきらびやかさに隠れてしまっているが郷は、れっきとした義経の正妻であり、義経と最期を共にした唯一の女性である。豪族の子として生まれ、平凡な人生を送るはずであったが、頼朝の政略により義経の妻となったことから、その運命は大きく悲劇的なものへと変

貌していく。慣れない^{みやこ}京での生活や義経には多くの愛妾がいることで、郷にとっては辛い日々が続く。しかし、その中でも、郷は義経という人間を愛し、ふれあうことでその人柄に想いを寄せる。政略での結婚である郷と義経であるが、二人の間には愛情が育っていた。そして、義経が奥州へ落ち延びたときも郷は実家へは戻らず、唯ひたすら愛する夫である義経の元へと向かうのである。郷にとって平泉での生活は、静や他の女性のいない義経と初めて過ごす、二人だけの心安らぐ日々であった。この、義経との僅かに残された月日は、様々な悲しみに耐えてきた悲しい女性への天からの贈り物であったのかも知れない。

頼朝の妻政子等とは異なり、自分の意志ではない婚姻であるにも拘わらず、夫とその兄の確執に巻き込まれ、実家の家族まで犠牲にしてしまうという余りにも矛盾で不幸な結果を招いてしまう郷。思えば、愛妾である静御前とは違った意味で、彼女ほど頼朝と義経の対立に振り回された女性はいない。いわば、彼女は源氏の二人の兄弟に出会うことにより、悲劇的な人生を辿ることになってしまう。

しかし、義経の他の女性達が離れていく中でも、一人最後まで付き従い、共に炎の中で最期を遂げる道を選んでいる。それは、夫婦の命運を共にするという、武将の妻また、正妻としての意地と誇り、そして、多くのものを失った郷なりのささやかな抵抗だったのかもしれない。いずれにせよ、悲劇的な結末を迎えることとなった郷であるが、その心は中世の女性の中でも一際魅力的にみえてくるのである。

■主な参考文献、そして、今回おすすめる図書

○『源義経』 渡辺保著 吉川弘文館 1986年。

おかざき よしひこ（司書・情報サービス課）